

言葉遣いをめぐる予備的考察

—われわれは何について語ろうとしているのか?—

山 影 進

本題の前に、指摘しておきたい点がある。まず、民族と国家という言葉をめぐる、気がついたことを述べておきたい。国際政治学の文脈では、民族というのは国家を持つことのできる人間集団を指す。民族主義や民族解放運動の主体、あるいは運動の組織体が考えているような国土の範囲に住み、動員したいと考えている人間の範囲、こういうものが民族である。人類学や民族学で、このような用法がなされていないのは承知しているが、ある人間集団が「民族」という名で呼ばれるかどうかは、国際政治上、決定的な意味を持つことになる。これをまず理解しなければ、現在の民族をめぐる国際関係を把握することはできない。これをどう考えるかは、非常に重要な問題になるだろう。

第二に、南アジアにおけるイスラーム教徒（ムスリム）の問題とも関連するが、中東イスラーム社会では、大ざっぱに言えば、エジプト・トルコ・イランという、三つの大きなイスラーム地域に、それぞれ約5千万人、合計で1億5千万人というムスリム人口が想定される。ここで注目したいのは、これとほぼ同規模のムスリム人口を抱えるインドネシアである。なぜ我々は、イスラームの世界を語るときに、インドネシアを除外しようとするのか。インドネシアを入れると、どのような不都合があるのか。これは考えておくべき問題ではないだろうか。

第三は、便宜的に区切られた地域に、時として非常にいらだちを覚えることである。特に人間集団の各種分布図の多くは、既成の地域分けで分断された表示になっており、境界部分の連続した分布を把握するのは、非常に難しい。ところが国際政治の分野では、境界にまたがるような民族集団が非常に重要な役割を果たしている場合がある。

便宜的に空間を区切って、何らかのシステムや類似性を見いだすことは、認識の方法として仕方がないことかもしれない。だが、仕方がないと納得しがたい気持ちも否めない。これはどのような形で納得していくべきなのか。地域研究の専門家に、是非、伺いたいところでもある。我々が研究対象としようとする、地図上に区切られた、便宜的な空間の範囲と、それ以上の意味を見いだすために我々が見るシステムとの間の関係は、どのように認識すればいいのだろうか。この点をもう少し深く考えていく必要があると思う。

もちろん、我々の世界認識は、空間とシステムのみを終始しているのではないが、とりあえずこの二つを対比しながら問題を探っていききたい。我々は同じこの言葉を使いながらも、その認識レベルは異なっている。その表現の幾つかのパターンを東南アジアに例をとってみてみよ

う。

○東南アジアという空間について、特定の意味ある特徴づけをできないのが、東南アジアという空間の特徴である。

○東南アジアという空間には、地域と呼んでも良いようなシステム（まとまり／ユニット）が（ひとつ／いくつか）存在している。

○東南アジアという空間には、東南アジアと名付けるのにふさわしい、ひとつのシステムが存在している。

○東南アジアと名付けるのにふさわしい、ひとつのシステムが覆っている空間が、東南アジアである。

○東南アジアという空間を包み込む、もっと大きな空間の上に、ひとつのシステムが存在している。

このような表現の違いは、どのような概念操作の中で、「東南アジア」という言葉を位置づけているかを明記しなければ、理解することは難しい。さらに問題を複雑にするのが、認識と願望における観察者と関与者の視点の表現である。その対象記述は、「我々」、「彼ら」という言葉でよく表されるが、その根拠や前提の曖昧さが気になるところである。

このような認識論からは、どうしてもイメージが湧きにくい。今日は敢えて、地域研究者が軽視し相対化するであろう「国家」を強調して、問題を考えてみたい。ただし、私は国家至上主義ではなく、国家という枠を超えたり、重複するような地域形成の認識でなければ、現実の世界を捉えることはできないと考えている。それでもなおかつ「国家」を強調し、地域関連の中の東南アジアを近代国家形成の視点からみてみたい。

今日の東南アジア10ヶ国によって、ある程度近似できる空間として、「東南アジア地域」と呼んでもよいと認識できるような機能的条件が満たされつつある。それは東南アジア諸国連合（ASEAN）の存在と活動により規定される部分が多い。東南アジアという空間の下側における、国民国家レベルでの一体性の進行と、上側における世界（東南アジアを包み込むような大地域）レベルの一体性進行と、東南アジアのシステム化は平行に進行してきている。

このような命題が意味を持ち得るのは、現在我々が東南アジアと呼んでいる空間をひとつにまとめるようなシステムが、かつては存在していなかったという前提があることによる。例えば、交易ネットワークや島嶼部国際関係、大陸部国際関係、植民地化というような、部分的なシステムとはみ出すシステムとの重層的な関係が、その空間に見られた実態であった。

空間的な東南アジアを認識させるきっかけとなったのは、連合軍が戦略区域として「東南ア

アジア」を区切ったというのが通説である。しかし、連合軍の戦略区域の設定には、対日作戦の必要性が背景にある。そこは日本軍が侵略し、占領していった土地である。それは昭和10年来の明確な日本の南進戦略によるものであり、日本がそういう認識をするのは、大正年代にまで遡ることができる。

そういう日本の関心が、現在の東南アジアという空間をくくるようになったひとつの要因である。東南アジアが外的要因によって区切られた空間だとすれば、それは戦前の日本によって区切られたと言えるのではないか。

日本は、単に東南アジアという空間認識を区切っただけではなく、そのシステム化にも関わったのではないだろうか。戦前の華僑ネットワークへの挑戦は失敗したが、戦後の東南アジア進出では華僑ネットワークを利用している。また、賠償という名で日本資本は経済進出を果たした。80年代以降は、西太平洋経済統合の要として、日本は経済的なネットワークの強化を図ってきた。東南アジアの一部の国では、経済開発の戦略に日本の持つ国際ネットワークを利用するようになり、日本の関与は単に空間を区切る以上の意味があったように思われる。

しかし、これで東南アジアという空間が、住民達の認識の上でまとまりを持つようになったわけではない。植民地枠組み、生業も、世界観の広がりもバラバラであった彼らに、東南アジアという枠組みを認識させるようになった契機は、やはりASEANではないかというのが私の仮説である。

1967年、ASEANはある意味で参加国の同床異夢で結成されたと言えるだろう。せいぜい善隣外交関係の保障でしかなかった。しかし、いったん結成されれば、ASEANを単位とした態勢が整えられていった。注目すべきは、これが決して国民国家を相対化する動きではなかったことだ。むしろ、ASEANという地域認識の共有によって、国民国家を強化していくという方策がとられてきたのである。

ASEANというのは、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール、タイ、そして後にブルネイも参加したが、常に東南アジアの一部分である。結成当初は、社会主義の北ベトナム、中立のビルマ、ラオス、カンボジアに対する、西側反共の国々の集まりであった。この構図は1970年代後半には、インドシナ対ASEANという対立に分かれたが、80年代以降はインドシナのASEAN接近が見られ、ASEANの理念が東南アジアでの正統性を獲得しつつある。これも、国民国家の強化のために参加しようという意図が働いている。今では東南アジアのASEAN化が進行していると言えるだろう。

では、東南アジアはASEAN的な理念で統合されてきたのか。事態はそれほど単純ではな

い。東南アジアの戦後の歴史は、東南アジアの人々、あるいは国々が、いかに外の世界に依存してきたかという歴史である。その状況は基本的に変わっていない。むしろ、いまASEANという組織は、ASEANをより大きな地域、あるいは、世界全体の中で相対化していこうとしている。ASEANの中で国民国家は相対化しているのではなく、この枠組みは両立している。それだけではなく、微妙なバランスの中で、ASEANそれ自体をより大きなシステムの中で位置づけようという動きがある。経済的には言うまでもなく、アジア太平洋経済協力の枠の中で、ASEANを存在感あるものにしようとしている。安全保障面でも、日本やアメリカ、ロシア、中国という、この地域に非常に大きな利害関心を持っている国々を取り込み、安全保障の対話を進めようとしている。

このようにASEAN諸国の指導者は、ASEANをそれぞれの国にとって利用価値のあるものにすると同時に、それ自体を唯一のよりどころにもしようとしている。世界の政治のネットワークと、経済のネットワークの中で、非常に微妙なバランスをとりながら彼らは東南アジアというものを位置づけようと模索しているのであろう。

東南アジアの地域性をこういう観点からみると、そこに住んでいる人々が、政府指導者に影響を受けて、ある種の政治的な空間、経済的な空間、そういう空間の上をいきわたる様々なメッセージ、そういうものを受け取るようになり、国家のレベルの認識も、地域のレベルの認識も、世界全体との関わりあいも深まりつつあるとまとめることができる。つまり、空間としての東南アジアが一つにまとまりつつあるということは、東南アジアというレベルが、非常に強いまとまりを持つという意味ではなく、重層的なまとまりの中で、東南アジアという一つのまとまりが近似的に覆う空間になりつつあるということだ。非常に複雑な多重のレベルで現象が動いていると言えるだろう。

コメント

福井 捷朗

近年、少数派ではあるが、自国以外の域内近隣国の研究をしようとする東南アジアの人達の動きがある。西欧的な国民国家の形成、あるいは植民地形成以前には、今日東南アジアと呼ばれている地域では、域内交流も人の移動も盛んに行われていた。だが、植民地体制下では、それぞれが宗主国の方へ向き、近隣国との交流も少なく、関心も小さくなった。その影響は未だにあると言われている。確かに1960年以降、欧米や日本のような域外諸国による東南アジア研究が盛んに行われるようになると、東南アジアの人達も留学や現地調査という形で東南アジア研究に参加することはあったが、そのほとんどは自国の研究であった。近隣国に対する知的な関心が、全くなかったわけではない。しかし、冷戦体制下では、ほとんど自国の安全保障に関連する問題意識での研究でしかなく、ジャーナリズムと学問的研究との境目も極めて曖昧であった。

域内諸国の研究者による外国研究の関心は、まず最初は欧米に向けられ、その次に、日本、中国、あるいは韓国へと向けられており、国境を接する隣国への関心は非常に遅れている。最近になってやっと、近隣国研究の重要性を主張する人達が、少数ながらも出てくるようになった。近隣国への積極的な研究意欲が生まれてきた背景には、冷戦終焉に伴う政治的背景、活発化している域内経済という背景、国境を越えた労働力移動に表れるような社会的な背景や、域内文化交流といった背景の変化もあろう。

まだ東南アジア地域の形成というところまではいかないが、少なくとも便宜的に東南アジアと言われている近隣国に関する研究も、そのような背景の変化と併行的である。これには、植民地以前には何らかの地域としてのまとまりがあったという漠然とした意識が、前提になっているのだろう。高等教育機関において、近隣国の言語教育が急速に広がりつつあることも、興味深い現象である。

近隣国研究は、自国のアイデンティティのために行われているものが多い。広義のタイ族を対象としたタイ研究者による研究が典型的だが、極端な例では、自らのアイデンティティを見いだすためにタイ国領土以外に住むタイ族の研究をするという関心の持ち方がある。これは国境を越えてはいるが、基本的にはタイ研究と言えるだろう。だが、その類の研究も多く見られるのが現状である。マレーシアでも、マレーシア国境以外に広く見られるマレー的要素や、マレー系の人達の研究が行われてきている。そういうものが何につながっていくのかはわからな

いが、かつての日本における、南洋日本人町研究や、照葉樹林文化研究を彷彿させる動きのように思える。

質疑応答

山影 福井さんのコメントは、植民地化以前の世界を想像しつつ、今日の分断状況を憂い、あるいはそれを乗り越えようとしているという東南アジアの人々の動きではないかと思う。

これには、東南アジア友好協力条約の前文で、ASEANはおろか、空間として切り取られた東南アジアに、何か共通する歴史的な絆がある、文化的な関係があるという、公然と嘘がうたわれてしまったという背景がある。それは政治的なシンボルであったのだろう。現在のアカデミックな研究は、それを裏付けようという、ある意味で本末転倒の現象である。東南アジアという地域の、過去の絆を証明しようというのは、それ自体が歴史研究として意味のあるものというより、何らかの将来的なイメージを作ろうという、研究者の情熱が感じられる。

土屋 三点、用語の確認をしておきたい。まず、レジメには「国民国家化」という言葉が使われている。これが一つのプロセスであるとするれば、その行き着く果てはどのように考えられるのか。「域外依存せざるをえない東南アジア」ということについて、そのコンテキストはどう捉えられているのか。また、地域研究者の認識に対する問いかけをされたが、地域研究者のデフィニションをどう考えられ

ているのか確認したい。

山影 私がイメージする国民国家の行き着く先は、文化や考え方が一様性になるということではない。逆説的に言うならば、多様性や異質なものの存在を政府が容認できる状態が、国民国家化の行き着く先ではないかと思う。ただその前提となるのは、国家の中に異質な人々が存在している事実ではなく、そういう人々が社会的に動員されていることが前提になる。つまり、人々の知識や力を何らかの形で動員し、放っておかないということである。それは時に、強制的な同化政策や、言語の押し付け、様々な暴力的な行為となって現れるが、ある程度までいけば、厳しい押し付けをしなくても、政府が安心できるようなレベルに到達するだろう。一枚岩的なことをしようしている間は、実は国民国家化はまだその途中にある。同一性を要求すればするほど、それに反発する異質な分子が必ず出てくる。例えばマレーシアからシンガポールが出てくることによって、その関係が安定的、友好的になったように、色々な分離・統合のプロセスがあるだろう。国民国家化とは、異質の人々も政治参加し、大きな紛争対立にならない状態だといえるだろう。

域外依存の問題は、国際関係的に考えてい

る。現在、東南アジア諸国政府が想定している望ましい状況を実現するには、域外の中国、日本、アメリカというような国々と、東南アジアとの関わり合いが大きな要因となる。従って東南アジアの国々は、そういう域外の国々の政策に適應すると同時に、ASEANとしてまとまることによって、域外諸国の政策や立場を自分達により有利なものにしようとする。そういう意味での域外依存で、経済的な繁栄を実現するための方法、あるいは各国政府が安心して国内問題に専念し、地域間協力を進められるような、安定的な安全保障を念頭においている。

最後の地域研究者の定義は、難しい問題だ。自分自身の研究成果や発見、他人に訴えたい研究内容を普遍化しようとするとき、その特定の場所に関する知見が地域という空間の代表であると規定されるような手法をとれば、地域研究者として表現していると言えるのではないか。私自身がASEANを語る場合は、むしろ国際政治のレベルであり、例えばヨーロッパで起こっていることと、ASEANで起こっていることを比べるような立場にある。

私自身が考えている地域研究者とは、アフリカニストや東南アジア研究者と自ら自負する人や、地域名を冠する学会に属し、自分の研究が対象である地域にとって何らかの意味があるだろうと思い、発言している人達のこ

とだ。

鈴木 董 中東研究者がなぜ中東だけを取り上げ、東南アジアをイスラームから切り離そうとするのかという質問があったので、一言発言しておきたい。多くの中東研究の場合、イスラーム世界と中東を明確に分けており、イスラーム世界とは歴史的に実体のある、過去に形成されてきた文明世界として考えている。中東という場合、東南アジアと同じように非常に戦略的な分脈で、しかも外在的に出てきた言葉であって、使いたくないけれども使わざるをえないという面もある。

なぜ中東という言葉を使わざるをえないのか。現地の人達自身も、その言葉を使うようになってきている状況もある。その根拠を考えると、現在の中東概念が欧米においても、現地においても、定着した歴史的な実体として、あるいは文化世界として、イスラーム世界の中である特異な特性を持った地域だということがある。それをひとまとまりのものと考え、中東という言葉で表していることになる。

その意味で、イスラーム世界、あるいはイスラーム圏を考えるとときには、東南アジア、あるいは中央アジア、南アジアの地域は、イスラームから切り離せない一帯だと言うことができる。